

調査・研究紹介

高齢者と農業

「農業の産業化」を超えて

一、労働の苦しみと喜び

労働とは本来的に苦痛であろうか、それとも喜びであろうか。答えは、当たり前のことだが、苦しい労働もあれば、楽しい労働もある、ということである。作家のドストエフスキーは自らの囚人体験をもとにした『死の家の記録』の中で、おぞましいほどの苦痛をもたらす刑罰について書いている。なかでも、地面に穴をほらせ、それをまた埋めることを繰り返させる刑罰ほど大きな苦痛をあたえる罰はないという。意味のない労働ほど苦しい労働はないのである。一方、価値の創造を行う芸術活動は、おそらく最も大きな喜びをもたらす労働の一つであるに違いない。ならば、農業労働は農業者にとって苦痛であろうか、それとも喜びであろうか。ここでは、すでに農業従事者の過半(五二%)を占めるようになった高齢(六五歳以上)農業者にとって農業は何か、また、その社会経済的意味について考えてみたい。

二、農業に対する高齢農業者の考え方

農水省が平成八年一二月に行った「高齢農業者に関するアンケート調査」(自営農業に一五〇日以上従事している六五歳以上の世帯主を対象)の結果から、高齢農業者の

農業観について見てみよう。

農業に従事する目的

高齢農業者が農業をする目的は、第一に「生計維持のため」(六九%)であり、「生きがい」(五〇%)、そして小遣い稼ぎ(一二%)と続く(複数回答)。所得獲得が農業の最大の目的だが、「生きがい」として、農業の非経済的な価値をきわめて高く評価していることに注目しなければならぬ。しかも、年齢別に見ると、農業を行うのは主に「生きがい」のためであると答えた人の割合は、高齢になるほど高くなる(六五 七〇歳で三二%、七〇 七五歳で三六%、七五歳以上では三八%)。

将来の意向

それでは、農業についての彼らの将来の意向はどうであろうか。後継ぎ予定者がいる高齢農業者の場合、「子供に継がせて自分も手伝いたい」が五五%とずば抜けて多い。一方、「子供に継がせて自分は引退したい」は一四%にすぎない。後継ぎがいても、相当の年齢になるまで農業を生きがいとして続けたいと大半の農業者が思っているのである。

同様に、後継ぎ予定者がいない高齢農業者の場合、「身体が続く限り農業を行いたい」が八三%と圧倒的に多く、「農業をやめたい」は一三%にすぎない。わずかな年金を除き、他に所得の源泉がないという経済的理由があることは間違いないだろうが、生きがいとして農業を高く位置づけていることも確かであろう。

三、農家の後継ぎ予定者の農業観

ところで、次世代の後継ぎ達は農業についてどのような考えを持っているのだろうか。やはり農水省の、農家の同居後継ぎ予定者を対象としたアンケート調査「農家のあとつぎ予定者の就業意向調査」(平成五年八月実施)があるので、それから農業に対する農家後継ぎの考え方をみてみよう。

「定年退職後には、家の農業を行いたい」という後継ぎが全体の三四%と最も多く、「農作業委託等により家の農業は続けていきたい」(二八%)、「農業の担い手が働けなくなったら勤務等をやめて家の農業を行いたい」(一〇%)をあわせると大半(七十二%)の後継ぎが何らかの形で農業を続けたいという意向を持っている。一方、「将来は農業をやめたい」という明確な意思を持つ後継ぎは一四%とわずかである。

他の事情(将来の農産物貿易の進展や価格動向、等)の影響もあるから実際どうなるかはともかく、農家後継ぎのかんりの割合が農業に対して強い愛着と自分が年を取った時に農業を引き継ぎたいという意思をもっているといえるだろう。

四、高齢農業者の経済的意味

しかし、現在の日本政府や学者の中には、高齢農業に対して否定的な考えが根強い。農業が産業として発展し、経済の国際化の中でも生き残っていくためには、意欲ある若い農業経営者達を中心となるような生産構造に日本農業が変わらなければならず、高齢農業者の存在はそのためにも邪魔だといっているのである。果たしてこれは正しいであろうか。

「生きがい」という非経済的な高い価値を農業におく高齢農業者の存在が、もっぱら経済的目的のために経営を行う若い農業者の経営発展の障害となる可能性はある。ただ、それは市場原理を乱し、資源の効率的な利用を妨げているといえるだろうか。

高齢者農業の存在は市場を歪めているから、高齢農業者の存在は市場を歪めているだろうか。この問いに対する答えは、明らかに「否」である。機械力の効率的な利用や高い技術、規模の経済性などを武器とする若い農業者に対し、高齢農業者はもっぱら低廉な労働力を武器に市場に臨む。

そして、実際高齢者農業が広く残存しているのは彼らが作る農産物の市場競争力が高いからであり、市場メカニズムは有効に機能しているといえよう。喩えていえば、学生アルバイトや主婦の低廉な労働力に依存するコンビニの方が、大手デパートよりも市場競争力が高いようなものである。

高齢者は資源を非効率に利用しているか

資源の効率的な利用という点ではどうであろうか。高齢農業者の存在は、労働力という人的資源については、効率的に利用している。現代の日本においては、周知のように最も貴重な資源は労働力である。農業は高齢者の労働力という貴重な資源を生産活動に活かしているといえよう。だが、農業機械など設備の有効活用という点では、確かに高齢農業者は効率的とはいえないかもしれない。とはいえ、農業における市場メカニズムが有効に機能している点、労働力の有効利用に寄与している点、サービス事業体などの発達によって高齢者農業の機械利用が今後効率化される可能性がある点などを考えれば、一概に高齢者農業が資源の非効率な配分を生んでいるとはいえないであろう。

五、「農業の産業化」を超えて

最初に見たように、農業が「生きがい」として高齢者にとって重要な非経済的価値を持つならば、もう一つ考えなければならぬのは、高齢者農業が持つ非経済的な、つまり社会的な意義である。

当然のことだが、人生の目的は生涯所得を最大化することではない。ヒンドウー教の考えによれば、人の理想的な一生は四つの段階(四住期)に分けることができるという。すなわち、訓練と教育の期間である学生期、社会で積極的に活動する家住期、俗世との縁を断って森に退く林住期、そして隠者となる遊行期である(セーン『ヒンド

ウー教』講談社現代新書)。人の一生の価値は、単にこの家住期においてどれだけ活発に活動したか、ましてどれだけの所得を獲得したか、だけでは計れない。社会活動の中心から退いた後、いかに老いを生きるかをも含めたトータルな一生のあり方によって人の一生の価値は評価されるといえるだろう。ならば、一国の社会の価値も同じではないか。一国の経済がいかに効率的に大量の財を生産するか、いかに大量の財を消費するかではなく、国民一人ひとりが死を迎えて自分の一生を価値(意味)あるものだったと思うことができる社会こそ、良い社会といえるに違いない。

そう考えると、農業を単に経済的側面からのみ評価することが間違いであることは明白であろう。少子高齢化がますます進むこれからの日本社会では、いかに意味(価値)ある老いを生きることができるといふ大きな課題に対し、農業が果たすべき役割はきわめて大きい。実際、農業の多面的機能の重要性を唱えた「食料・農業・農村基本法」は、「(高齢者が)生きがいを持つて農業に関する活動を行うことができる環境整備を推進し、高齢農業者の福祉の向上を図る」(第二十七条)と明記している。

社会をトータルに見る視点から、積極的に農業における高齢者の位置づけを行うことは、世界に例を見ない速さで高齢社会を迎えようとしている日本にとって重要な課題の一つといえるだろう。(須田敏彦)